

塩原多助旅日記

三遊亭円朝

青空文庫

いや是は若林先生、さア此方へお這入んなさい。どうも久し振でお目に掛りました。
 裏猿楽町二番地へ御転住になつたといふ事でございますから、一寸お家見舞にあ
 がるんですが、どうも何も貴方のお座敷へ出すやうな話がないので、つい御無沙汰致しま
 した。時に斯ういふ話があるんです。是は貴方も御承知の石切河岸にゐた故人柴田是
 真翁の処へ私が行つて聞いた話ですが、是は可笑しいて……私が何処へ行つても口馴れ
 てお喋りをするのは御承知の塩原多助の伝だが、此の多助の伝は是真翁が教へてく
 れたのが初まりだが、可笑しいぢやありませんか。どういふ訳かといふと、其頃私が怪
 談の話の種子を調べようと思つて、方々へ行つて怪談の種子を買出したと云
 ふのは、私の家に百幅幽霊の掛物があるから、百怪談といふものを拵へて話した
 いと思ふ時分の事で、其頃はまだ世の中が開けないで、怪談の話の売れる時分だか
 ら、種子を探して歩いた。或時は真翁の処へ行くと、是真翁が「お前は此頃大
 層怪談の種子を探しておいで下さうだ。」「どうか怪談の種子を百種買出し
 て見たいと思ひます。八代目団十郎や市村羽左衛門の怪談、沢村宗十郎の御殿女
 中の怪談、岩井半四郎の怪談、其他聞いた事見た事を種々集めてゐるんで

すが」と云ふと、是真翁が「円朝さん、妙な怪談の種子がある。こりやア面白
い怪談だが、お前何を知らないか、塩原多助といふ本所相生町二丁目の炭
屋の怪談を」「知りませぬ」「さうかね、塩原多助といふ炭屋の井戸は内井戸であ
つたさうだが、其家はたいした身代だから、何とかいふ名のある結構な石でこしら
へた立派な井戸ださうだ。ところが其の井戸の中へ嫁が身を投げて死んだり、二代目と三
代目の主人が気違ひになつたりしたのが、其家の潰れる初まりといふので、そりやア何と
も云へない凄い怪談がある」「へー、それはどう云ふ筋です」「委しい事は知らない
が、何でも其の初代の多助といふ人は上州の方から出て来た人で、同じ国者が多
助を使つて来て、私もお前のやうな大きな身代になりたい、国の家が潰れたから江戸で
稼いで、国の家を再興したいと思つて出て来たのだから、どうか資本を貸してくれと云
ふと、多助がそりやアいけない、他人に資本を借りてやるやうな事では仕方がない、何で
も自分で苦しんで蟻が塔を積むやうにポツ／＼身代をこしらへたのでなくては、大きな
身代になれるものではないから、兎も角も細かい商ひをして二朱か三朱の裏店へ住つ
て、一生懸命に稼ぎ、朝は暗い中から商ひに出、日が暮ってから帰つて来るやうにし、
夜は翌日の買出しに出る支度をし、一時か一時半ほか寝ないで稼いで、金を貯めなけれ

ば、ほんたう 本か 当ね に金た は貯ま らない。私わし なども其その 位くら な苦く しみをして漸やう く斯か ういふ身み の上う になつたのだ。と云い はれて此この 人ひと も多た 助すけ のいふことを成なる 程ほど と感かん 心しん したから、自分なん も何あ ぞ商あ ひをしようといふので、是これ から漬つけ 物もの 屋や を初は めた。すると相さう 応おう に商あ ひもあるから、商あ ひ高たか の内うち より貯た めて置いて、これな を多た 助すけ に預あづ けたのが段だん 々く 積つも つて、二に 百ひゃく 兩りやう ばかりになつた。其その 頃ころ の百ひゃく 兩りやう と二に 百ひゃく 兩りやう と云い ふのは大だい したものだから、もう是これ で国くに へ歸かへ つて田でん 地ち も買か へるし、家いへ も建た てられるといふので、大おほ いに悦よろこ んで多た 助すけ に相さう 談だん の上うへ、国くに へ歸かへ つた。国くに へ歸かへ つて田でん 地ち を買か へる約束やくそく をしたり、家いへ を建た てる木き 材ざい を山やま から伐き り出だ すやうにしたり、ちやんと手て 筭はす を付つ けて江え 戸ど へ歸かへ つて来く ると、塩しほ 原はら 多た 助すけ が死し んでゐた。さア大おほ いに驚おどろ いて、早さつ 速そく 多た 助すけ の家うち へ行い つて、番ばん 頭とう に掛か 合あ ふと、番ばん 頭とう は狡ずる い奴やつ だから、そんなものはお預あづ かり申まう した覺おぼ えはござりませぬ、大おほ 旦だん 那な 様さま お亡かく れの時とき お遺ゆめ 言ごん もござりませぬから上あ げる事こと は出来でき ない、一たい 体たい お前まへ さんは何なに を証しょう 拠こ に預あづ けたと云い ひなさるか、預あづ けたものなら証しょう 拠こ が無な ければならない。といふ取と つても付あ けない挨拶あいさつ。其その 時じ 分ぶん は人ひと 間ま が大おほ 様やう だから、金かね を預あづ ける通かよひ。帳やう をこしらへて、一いち 々く 附つ けては置あ いたが、その帳ちやう 面めん は多た 助すけ の方ほう へ預あづ けた儘ま 国くに へ歸かへ つたのを、番ばん 頭とう がちよろまかしてしまつたから、何なに も証しょう 拠こ はない。さア其その 人ひと は口く 惜しやく しくつて耐た らないから、預あづ けたに違ちが ひない、多た 助すけ さんさへあれば其その 様やう なことを云い ふ筭はす は

ないのだから、返してくれ。と云つても肯かない。決して預かつた覚えはない、と云ひ張る。預けた預からないの争ひになつた処が、出入りの車力や仕事師が多勢集つて来て、此奴は騙取に違ひないと云ふので、ポカ／＼殴つて表へ突出したが、証拠がないから表もてむきうつた

向 訴へることが出来ない。頭へ疵を付けられて泣く／＼帰つたが、国では田地を買ひ、木材を伐り出す約束をして、手金まで打つてあるから、今更金が出来ないと云つて帰ることは出来ない。昔の人で了簡が狭いから、途方に暮れてすご／＼と宅へ帰り、女房に一伍一什を話し、此上は夫婦別れをして、七歳ばかりになる女の子を女房に預けて、国へ帰るより仕方がない。と云ふと、お前さんのやうな生地のないものは、ない、預けたものを預からないと云はれて、はいと云つて帰つて来ると云ふのは、何ういふ訳です、殊に頭へ疵を付けられて帰つて来るとは、余り生地が無さ過ぎ、そんな生地のない人と連添つてゐるのは嫌だ、此子はお前さんの子だからお前さんが育てるが宜い、私にもつと気丈な人のところへ縁付くから、といふ薄情な言ひ分、此女は国から連れて来たのではない、江戸で持つた女か知れない、それは判然分らないが、何しろ薄情の女だから亭主を表へ突き出す。男は怨めしきうに宅の方を睨んで、泣く／＼向うへ行かうとすると、お父つあんエーと云つて女の子が追つ掛けて来るから、どうかお母

さんの処へ帰つてくれ、お父つアんは無ないものと思つてくれと言ひ聞かせて、泣きながら
 帰る子の後姿を見送り、あゝ口惜くやしい、二代目の多助たすけといふ奴は恐ろしい奴だ、親父
 に金を預けた事を知つてゐながら、預かつた覚えはないと云ふのは酷ひどい奴だ、塩原の家
 へ草を生やさずに置くべきか、と云つて吾妻橋からドンブリと身を投げた。さうすると
 丸朝さん、その死骸が何ういふ潮時であつたか知らないが、流れくつて塩原の前の
 棧橋へ着いたさうだ。それを店の小僧が見付けて、土左衛門が着いてゐます土左衛門が
 着いてゐますと云つて騒ぐ。若い衆がどれと云つて行つて見ると、どうも先刻店へ来て、
 番頭さんと争ひをして突出された田舎者に似てゐますといふから、どれと云つて番
 頭が行つて見ると、成程先刻店へ来た田舎者の土左衛門だから、悪人ながらも宜
 い心持はしない、身の毛慄立つたが、土左衛門突出してしまへと云ふので、仕事師が
 手鍵を持つて来たり、軒子が長棹を持つて来たりして突出すと、また其の棧橋へ戻つ
 て来る、幾ら突出しても戻つて来るから、そんなこつてはいけないと云ふので、三人
 掛つて漸く突出したところが、棧橋で車力が二人即死してしまひ、仕事師が一人氣
 が違つてしまつたと云ふ騒ぎ。それから其れが祟たりはしないか〜といふ氣病みで、今い
 ふ神経病とか何とか云ふのだらうが、二代目はそれを氣病みにして遂に氣が違つた。

それから三代目が嫁を貰つたのは、名前は忘れたが、何でもお旗本のお嬢様とかいふことだつた。お旗本のお嬢様が嫁に来るやうな身代になつたのだから、たいした身代になつた。すると此の嫁を姉と番頭とで虐めたので、嫁は辛くて居られないから、実家へ帰ると、親父は昔氣質の武士だから、なか／＼肯かない、去られて来るやうな者は手打にしてしまふ、仮令どんな事があらうとも、女は其の嫁した家を本当の家としなければならぬと云ふことを云ひ聞かして帰されたから、途方にくれて其の嫁が塩原の内井戸へ飛込んで幽霊に出るといふのが潰れ初めで、あの大きな家が潰れてしまつたが、何とこれは面白い怪談だらう」といふ話を聞いて、成程これは面白い話だ、これを種子にして面白い話をこしらへたいと思つたが、其の塩原多助といふ者が本所相生町に居たか居ないか、名さへ始めて聞いた位だから分らない。兎に角本所へ行つて探して見ようと思つて、是真翁の家を暇乞して是から直ぐに本所へ行きました。

さて是真翁の宅を暇乞して、直に本所へ行つて、少し懇意の人があつたから段々聞いて見ると、二つ目の橋の側に金物屋さんが有るから、そこへ行つて聞いたら分るだらうと云ふ。それから其の金物屋さんで、名前は云へないが、是々の炭屋が有り

ましたかと聞くと、成程塩原多助といふ炭屋があつたさうだが、それは余程古いこと
 だといふ。それでは塩原のことを委しく知つてゐる人がありませうかと云つて聞いたと
 ころが、無いといふ。何処を捜しても分らない。其時六十九になる、仕事師の頭といふ
 ほどではないが、世話番ぐらゐの人に聞くと、私は塩原の家へ出入をしてゐたが、細か
 いことは知りませぬといふ。それでは塩原の寺は何処でせうと聞いたところが、浅草
 の森下の——たしか東陽寺といふ禅宗寺だといふことでございますといふ。それが
 直に本所を出て吾妻橋を渡つて、森下へ行つて捜すと、今の八軒寺町に曹洞
 宗の東陽寺といふ寺があつた。門の所で車から下りてズツと這入ると、玄関の襖
 紙に円に十の字の標が付いてゐる。はてな、これは薩摩様のお寺ではないかと思ひま
 した。門番の処で花を買つて十銭散財して、お墓を掃除して下さい、塩原多助の墓
 は此方でございませうか、私は塩原の縁類の者でございしますが、始めてまゐつたので
 墓は知りませぬから、案内して下さいと云ふと、「へい畏りました」と云つて墓へ案内し
 て掃除してくれましたから、墓の前に向つて私は縁類でも何でもないが、先祖代々と
 回向をしながら、只見ると、墓石を取巻いて戒名が彫つてある。第一に塩原多助
 と深く彫つてある。石塔の裏には新らしい塔婆が立つてゐて、それに梅廼屋と書いてあ

る。どういふ訳で梅廼屋が塔婆を上げたか、不審に思ひながら、矢立と紙入の鼻紙を
 取出して、戒名や俗名を皆写しましたが、年号月日が判然分りませぬから、
 寺の玄関へ掛つて、「お頼み申します」といふと、小坊主が出て取次ぎますから、
 「わたしほんじよあひおひちやう
 一私は本所相生町二丁目の塩原多助の縁類のものでございますが、まだ塩
 原の墓も知らず、唯塩原のお寺は此方だといふことを聞伝へて、今日お墓参り
 にまゐりました、これはほんの心ばかりでございますが、どうか先代多助の御回向を願
 ひたいものでございます」と云つて金を一円包んで出すと、奥から和尚様が出て来まし
 て、「あなたが塩原多助の御縁類の方でございますか、愚僧が当住で……只今御
 回向を……」「いえ、今日は抛ないことで急ぎますから、御回向は後でなすつて下さい
 ……塔婆をお立てなすつて、どうぞ御回向を願ひます」「畏りました」と茶を入れて金
 米糖か何かを出します。すると和尚さんの手許に長谷川町の待合の梅廼屋の団扇
 が二本有りますから、はてな此寺に梅廼屋の団扇のあるのは何ういふ訳か、殊に塩原
 の墓にも梅廼屋の塔婆が立つて居りましたから、何か訳のあることと思つて、「和尚さ
 ん、こゝにある団扇は長川谷町の待合の梅廼屋の団扇ですか」「左様です」「梅廼屋
 は此方の檀家でございますか」「いえ檀家といふ訳ではありませぬが、長い間塩原の附

けとくけ 屈をしてゐる人は梅廼屋ほかありませぬ、それで此この団扇があるのです」「それは何
 ういふ訳わけです」と聞くと、梅廼屋は五代目だの塩原多助の女房で、それが亭主が亡
 つてから、長谷川町へ梅廼屋といふ待合を出したのです」「へえーさうでございませ
 か」それぢやア梅廼屋のお母に聞けば塩原の事は委くしく分わかる。梅廼屋に聞くのは造作も
 ない事だ。といふのは梅廼屋は落語社の寄合茶屋でございませぬから……」「有難ありがた
 うございませぬ、どうか御回向を願ひます、又参詣を致いたします」と云つて、それから直す
 浜町一丁目の花屋敷の相鉄といふ料理屋へ行つて、お膳を誂あつちへ、家の車をやつ
 て、此この車で直すぐきに來てくれと云つて梅廼屋を迎むかへにやりました。
 梅廼屋は前にも申まうしました通り、落語家一統の寄合茶屋で、殊ことに当時たう私たくしは落語家の頭と
 取うどりをして居をりましたから、為ためになるお客と思ひもしまいが、早速さつ其その車で來てくれ
 ました。「何どうしたんです、何か急きふの御用ごようですか」「いや、改あらたまつてお聞き申まうしたいのだ
 が、お前は塩原といふ炭問屋へ嫁よめになつた事が有あるさうだ」「いゝえ、炭問屋は疾
 うに潰つぶれて、お厩橋へ來た時わたくし私えんづが縁付いたのです」「お前まへの御亭主は」「秀三郎と
 云つて五代目でございませぬ」「早く死んだのかえ」「へえ、少し氣きが違ちがつて早く死にまし
 た」と云いふから、成程なるほど是真翁ぜしんの話の通り崇たつたのだなと思おひありました。「お前まへさん

の所に何か書物はありませぬかえ——御先祖塩原多助の書類か何か残つてゐませぬか。「何も有りませぬ、少しは残つてゐた物も有りましたが、此前の火事で焼きましたから、書付類はありませぬが、御先祖様の着た黒羽二重に大きな轡の紋の附いた着物が一枚あります。それは二代目塩原が、大層良い身代になつて跡目相続をした時、お父さん、お前さんはもう是だけの身代になつたら、少しはさつぱりした着物をお召しなさるが宜い、何時までも木綿の筒ツぽでは可笑しいから、これを着て下さいと云つて、其の黒羽二重の着物を出したところが、こんな物を着るやうで、商人の身代が上るものかと云つて、一度も着たことは無かつたさうです。其の着物が残つて居ります。それから御先代の木像と過去帳が残つて居ります」「それでは、ちよいとそれを持つて来て貰ひたい」といふと、女将は直に車に乗つて行つて取つて来ました。其中に誂へた御飯が出来ましたから、御飯を食べて、其の過去帳を皆写してしまつた。其の過去帳の中に「塩原多助養父塩原寛右衛門、実父塩原寛右衛門」と同じ名前が書いてある。はてな、同じ名前は変だと思つたから、「お母さん、こゝに同じ名前があるが、是は何ういふ訳だらう」と聞くと、「それは私には分りませぬ、そんな事が書物にあつたと云ひますけれども、私には分りませぬ」「初代の多助といふ人は上州の人ださうですが、

さうかえ」「さうでございます、上州沼田の在だと云ふことでございます」「何処村といふことは分りませぬか」「どうも分りませぬ」「それぢや少し聞いたことが有るから、私は一つ沼田へ行つて見ようと思ふ」「沼田の親類もあの五代目が達者の時分は折々尋ねて来ましたが、亡つて後は音沙汰はありません、もしお逢ひになつたら、どうか宜しく……」「何といふ名前です」「お師匠さん、私は年を老つて物おぼえが悪くなつて、よく覚えて居りませぬが、何でも多の字の付く名前でしたが、忘れしました」「分りませぬか」「分りませぬ」どうも村名も分らず、名前も分らず、殆ど困りましたけれども、細かに尋ねたら知れぬ事もあるまいと、是から宅へ歸つて、直に旅立の支度を始めたから、宅の者は驚いて、何処へ行くといふ。少し理由があつて旅をすると云ふと、弟子や何かが一緒に行きたがるが、弟子では少し都合の悪いことがある。宅に酒井伝吉といふ車を曳く男がある、此男は力が九人力ある、なぜ九人力あるかといふと、大根河岸の親類の三周へ火事の手伝ひにやつたところが、一人で畳を一度に九枚持出したから、九人力あると私が考へた。其の伝吉を呼んで、「時に私は今度下野から上州の方へ行くに就て、お前を供に連れて行かうと思ふが、面白くも何ともない、ひどい山中へ行くんだが、行くかえ」「それは有難い、——どんな山の中でも行きます、私の生

やうこく 国は越中の富山で、反魂丹売ですから、荷物にものつを脊負せおつて、まだ薬くすりの広ひろまらない
 山の中ばかり売うつて歩くのです、さうして又翌年またよくねん其の山の中そのを売うつて歩くので、山の中
 は歩きつけて居をります、又私まわしは力ちからがありますから、途中とちゆうで追剥おひはぎが五人や六人出ても大丈
 夫おでございます、富山とやまの薬屋くすりやは風呂敷ふろしきを前まへで本ほん当たうに結むすんでは居をりませぬ、追剥おひはぎにで
 も逢あふと、直すぐに風呂敷ふろしきの結び目むすぶがずつと抜ぬけてしまつて、後うしろへ荷物にものつを投なげ出し、直すぐとヒ
 首くちを抜ぬいて追剥おひはぎと闘たうふくらるでなければ、逆とても薬屋くすりやは出来できませぬ、私わたしが行ゆけば大丈
 夫おでございます、御安心ごあんしんなさい、「さうかえ、足は大丈夫かえ」「足は大丈夫でございま
 す、車を引ひいてゐる位くらゐでございますから」と云いふので、是これから支度したくをしまして、両人りやうにん
 で出でかけましたが、何なんでも歩あかなければ実地じつちは履ふめませぬ。東とう京きやうの内うちはうるさいから
 車くるまに乗のつて、千住掃部宿せんぢうかもんじゆくで車くるまより下おりて、是これから上じやう州しゆう沼田ぬまたへ捜さがしに行ゆきました。

(般若林珙藏筆記)

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

塩原多助旅日記

三遊亭円朝

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>